



イスタンブール -Isutanbul-
2000年の歴史遺産が重層的・複合的に残る街

スレイマニエモスクの円蓋越しに望む新市街

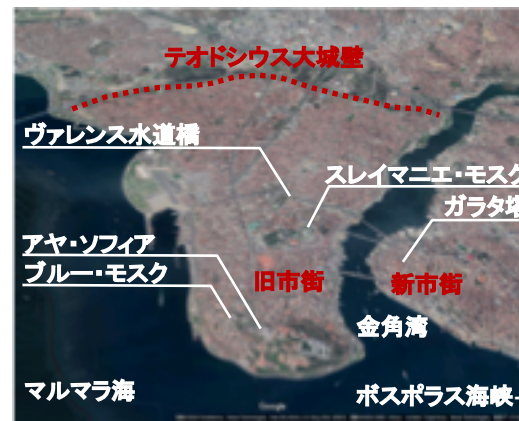


1453年、ビザンツ帝国(東ローマ帝国)の首都コンスタンチノーブルがオスマン帝国の攻撃により陥落します。二千年にわたり欧州世界に君臨してきたローマが消滅した瞬間でした。

しかし、それから500年、イスタンブールと名を変えたいまも、街にはローマ時代の名残が色濃く残っています。イスラム教国オスマン帝国のスルタン(君主)が自らをローマ皇帝の継承者を自認したことが要因の一つです。

イスタンブールは、2000年の歴史が重層的に積み重なった街です。そして、キリスト教とイスラム教、東洋と西洋の文明が重なり合った街でもあります。

今回の街歩きは、そんなイスタンブールの街なかにも、ローマ帝国時代の名残を探すことにします。



アヤソフィアの気高さは 宗教の違いを乗り越えた



アヤ・ソフィア



ブルーモスク

アヤ・ソフィアの建築様式を踏襲している

ローマ帝国の名残を最も色濃く今に伝えているのが、アヤ・ソフィアです。

アヤ・ソフィアは6世紀に建築されたキリスト教東方正教会の大聖堂ですが、メフメト2世はイスタンブール占領後にイスラム教モスクに転用します。

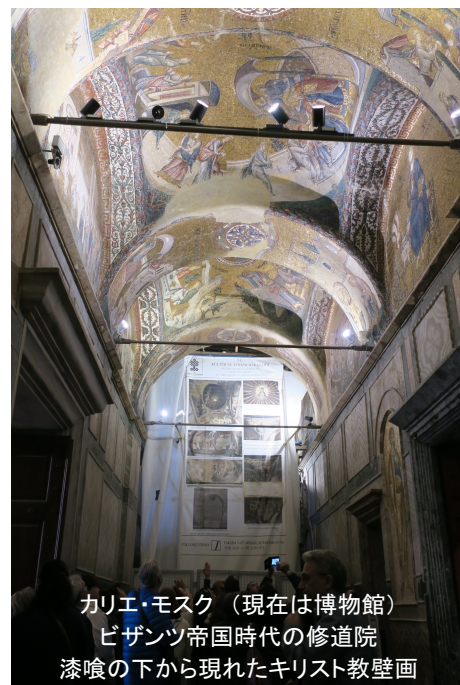
そして、異教徒の大聖堂をモスクに転用しただけでなく、その建築様式、中央にドームを冠した大空間を設けて外周をバットレスと半ドームが支える構造形式を、その後に関次いで建築されたイスラム大寺院の模範としました。

イスタンブールに遷都した後、オスマン帝国は領内に王立の金曜礼拝モスク(街の中心となる大型モスクのこと)を相次いで建立していきます。

その際の建築様式の模範を示したのが、イスラム建築家のミマール・シナンでした。

帝国最盛期のスルタン・スレイマン一世は、自らの名を冠した史上最大規模のスレイマニエ・モスクの建築を彼に委ねます。

シナンは設計にあたって、ビザンツ帝国で最高位の格式を誇ったアヤ・ソフィアの建築様式を踏襲して、壮大無比の大モスクを建築しました。



カリエ・モスク (現在は博物館)
ビザンツ帝国時代の修道院
漆喰の下から現れたキリスト教壁画

アヤ・ソフィア寺院

かつてのモスクですが、いまは博物館として一般公開されています。モスク転用後に塗り込められた漆喰がはぎ落とされ、ローマ帝国時代の見事なキリスト教壁画を見ることができます。

テオドシウス大城壁

異教徒に囲まれながら 帝国を1100年間守り続けた城壁



1000年にわたりビザンツ帝国を守り続けた大城壁も、陸海ともに強勢を誇ったオスマン帝国にとっては無用の長物だったようです。共和国時代に入ってから部分的には修復されてきたものの、全体としてはかなり荒廃が進んでいます。



城壁は石と煉瓦の組積造

イスタンブール旧市街は、西欧人が金角湾(ゴールデンホーン)と呼ぶ細長い河口のような湾によって北側の陸地から隔てられ、東はボスポラス海峡、南はマルマラ海に面しています。

これに対して、西側のみは、その西方に広がる欧州トラキア地方のと陸続きであり、陸上からの大規模な攻撃に晒されやすかったのです。このため、最大の弱点たる西側の防衛のために、コンスタンティヌス大帝時代以来、次々と城壁が設けられてきました。

4世紀後半に始まるゲルマン民族の大移動はローマ帝国を震撼させ、410年には、ゲルマン民族一派西ゴート族がローマに侵入して、略奪されるという前代未聞の大事件は、コンスタンチノーブルを更なる大城壁の建設へと駆り立てました。

テオドシウス帝による延長5.6kmに及ぶ三重構造の大城壁は413年に完成します。それまでの城壁の最外周に位置し、かつ最大のものでした。これにより、コンスタンチノーブルは史上稀に見る大要塞都市となり、その後1100年にわたり、ビザンツ帝国は外敵から守られるのです。

ビザンツの帝都を数知れぬ敵襲から守った大城壁は、オスマン帝国によるコンスタンチノーブル征服後も、補修がなされ、なかりの間、原形を保っていたようです。

大城壁の三重壁

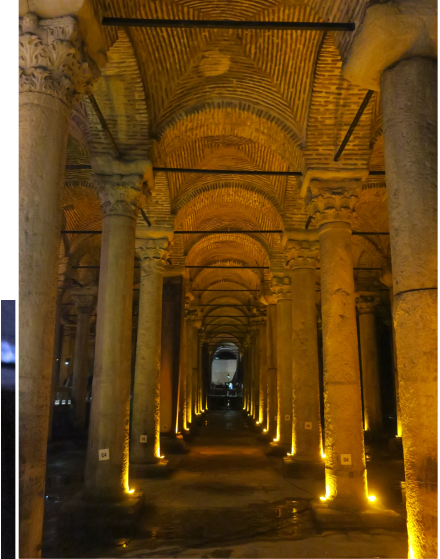


パノラマ展示館で再現される
オスマン帝国総攻撃の風景

イスタンブールは起伏の激しい丘陵地にあるため、ローマ時代の都市建設以来、飲料水の確保が大きな課題となってきました。

4世紀後半、ローマ皇帝ヴェレンス帝の治世に、はるか20km北方の黒海に近いベオグラード森など3ヶ所を水源とする総延長550kmに渡る水道網を完成させ、末端には水道水を貯留する壮大な地下貯水池まで建設しました。

18世紀初めまで使われてきたようで、今も見事にその姿を残しています。



地下貯水池はローマ神殿のように作られている。
柱脚にはローマ神話のメデューサの彫像がある。



旧市街中心部に残るヴァレンス水道橋

新市街 欧州商人たちの居留地 -コスモポリタンな街-



旧市街から金角湾越しに望む旧市街のガラタ塔

新市街を歩くと、欧州のどこかの街に迷い込んだような錯覚に陥る。ここには、美しい近代西欧建築が競うように建ち並んでいるから。

新市街といっても、ビザンツ帝国時代からある街で、当時はイタリアのジェノバ商人の居留地として栄えました。オスマン帝国の支配下となった後も、数多の欧州の商

館が軒を連ねて、コスモポリタンの様相を呈してきました。

その先駆者は、都市国家ジェノバ共和国の商人達です。ビザンツ皇帝から自治権を獲得した彼らは、城壁とガラタ塔を建設して、そこからボスポラス海峡を行き交う貿易船を監視し、そして旧市街の帝国首都の動静を注視していたのです。



フランス風の пассаージュ

この時代のコンスタンチノーブルとイタリア商人の関係には補足が必要です。

11世紀以降、イタリアの都市国家(アマルフィ、ピサ、ジェノバ、ベネチアの4共和国)は、東方貿易を独占する海運国として繁栄を極めます。この内、ベネチアのみがアドリア海に面してビザンチン帝国の支配下にありましたが、帝国衰退に伴って自治権を得て、強大な海軍力を要して東方貿易を拡大していった末に、歴史上とんでもない大事件を引き起こします。

第4回十字軍(1202-1204)は、フランスの諸侯とベネチアを中心に組織されますが、当初の目的であった聖地奪還には向かわず、あるうことか、キリスト教国の東ローマ帝国に攻め込み、コンスタンティノーブルを占領して、略奪・殺戮の限りを尽くしたのです。

その60年後、ようやくコンスタンチノーブルを奪還したビザンツ帝国は、ヴェネチア牽制を兼ねて、その最大のライバル、ジェノバ商人に新市街を自治居留地として与えて東方貿易を委ねました。もはやビザンツ帝国には、東方貿易を仕切るだけの海軍力もなく、欧州の商人に頼らざるを得なかったのです。

ところが、ジェノバ商人はビザンツ帝国の停止命令を無視して、周囲に城壁を築いたばかりか、斜面の中腹には物見塔まで建築してしまいます。それが今あるガラタ塔で、1348年のことでした。

その後継のオスマン帝国は、自治権こそ認めなかったものの、キリスト教徒やユダヤ教徒の商人達の居住を認め、近代に至るまで、新市街は非ムスリム臣民や西欧人の住まうコスモポリタンな街として存続しました。



急勾配の道路沿いに並ぶ西欧建築